

「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」

平成 18 年度採択研究代表者

須永 剛司

(多摩美術大学 美術学部 情報デザイン学科 教授)

「情報デザインによる市民芸術創出プラットフォームの構築」

1. 研究実施の概要

研究目標である市民芸術創出プラットフォームの「基本構想」策定を行った。同構想では、プラットフォームを「それぞれの社会状況におかれた市民表現の集積・編集・交換を活性化するために、技術システム（情報コミュニケーション技術を用いたネットワークやデバイス）と文化プログラム（表現をめぐる学習や協調活動のカリキュラム、教材、環境）の統合的利用による基盤環境の構築」と定義した。その環境利用の目的は、市民が個人やグループで行う表現を育て、それぞれの表現者が自己や他者の表現を解釈し意味を見いだすこと、またそれらのプロセスをコミュニティや社会で共有することである。それら意味をともなった市民の表現群が市民芸術である。このことを、「表現があふれる社会」から「表現が編みあがる社会」への変革とし、このプラットフォーム構築のコンセプトとした。

また、プラットフォームを研究し開発し実装するフィールドとなる社会的な実践の場として、ビジネスや極私的な空間を越えて、公共的なコミュニケーション空間を設定した。たとえば、ミュージアムや放送局にプラットフォームが実装され、そこが人々の共同的な表現活動の中心となる。そこから生まれるさまざまな表現が、このプラットフォームをとおして日常的な生活世界での表現に波及し、表現が編まれる社会を形成する。現在、利活用のシナリオ設計として、このプラットフォームにおいていつ、誰が、どこでつくった、なにを、どのように表現し共有するのか、そのためにどんな文化的なしくみと技術的なしくみが必要なのか、検討を開始している。

市民表現をとりまく社会状況としての問題群の明確化、そこから導かれる表現活動のための文化プログラムの構築、そしてそれを支える技術システムの構築が課題である。これらの課題を相互補完的に連携させるため、分野を横断する研究方法の検討も行っている。その試みとして、デザイン、理工、文化系からなる 4 研究グループの協調から次の成果をあげた：参加体験型の表現活動を行うワークショップの実施とそれをとおした課題群連携を試みた。またこの研究の意義と課題を広く国内外に問うために、ウェブサイトとパンフレットを作成した。あわせて、日本マス・コミュニケーション学会、デンマーク・コペン

ハーゲン大学及び同オールボ大学の国際シンポジウムでこの基本構想を共同発表し議論を行った。

次年度はこれらの成果を踏まえ、さまざまな社会状況におかれた公共的なコミュニケーション空間の活性化を図るための表現活動に着目する。そこから表現を支える技術システムと文化プログラムについての研究と開発をすすめる。具体的には公共文化施設であるミュージアムや放送局などと連携したワークショップを「批判的メディア実践」の観点から実験的に実施し、この研究プロジェクトを展開する。

2. 研究実施内容

本研究が取り組むのは、市民による表現を復権し社会全体の芸術文化を再編するという主題である。人々が豊かな「表現の社会」をつくるために、市民がおこなう多様な表現活動を支えるためのプラットフォーム構築を研究の目的としている。

平成 18 年度は本プロジェクトの基本構想を策定した。「それぞれの社会状況におかれた市民による表現の集積・編集・交換を活性化するために、技術システムと文化プログラムの統合的利用による基盤環境の構築」である。この構想は（１）市民表現を取り巻く社会状況と問題群を明らかにし、（２）それを解決するための「技術システム」と「文化プログラム」を研究と開発の対象として設定すること。また、（３）その開発を実現するために不可欠な、デザイン系、理工系、文化系グループの学際的な共同のための方法論的枠組みを構築すること、の３点からなりたっている。そして本プロジェクトを「メディア・エクスプリモ (Media Exprimo)」と命名した。

この構想策定のために各グループは次のような活動をおこなった。

須永グループはおもに三系統の研究を実施した。第一に表現構造の研究として、参加体験型表現活動を行う実験的ワークショップを実施し、あわせて国内外の市民表現活動実践の調査を行った。第二に表現要素の研究として、実施したワークショップで生まれた多様な表現物を分析しその構成について検討し、そこから複数の習作による技術システムインタフェースの基本デザインを制作した。また、プラットフォーム機能として構想する、集積された複数表現の「俯瞰」と「再構成」を視覚化した造形プロトタイプを制作しセミナーで発表した。第三に技術システムのデザイン研究として、生活や労働など日常生活をモチーフとした表現活動と表現よるコミュニティ形成活動を支える、ツールの概要デザインを開発した。それらをとおして、技術システムと文化プログラムを結合させる情報デザインの基本的な枠組みについて検討した。

水越グループはおもに三系統の研究を実施した。第一に、国内外の市民のメディア表現活動、関連するワークショップの調査分析をすすめ、現代社会における市民芸術、メディ

ア表現の実態を浮き彫りにし、それらがおかれた社会状況と問題のありかを明らかにした。第二に、メディア論、メディア・リテラシーなどの思想的、実践的検討を通じて、学際的協働型方法論の理論枠組みである「批判的メディア実践 (Critical Media Practice)」を構築した。これはワークショップの実践評価を中軸として、1) 学際的研究チームが分析知と創造知を連動させつつ研究実践を展開することと、2) ワークショップ参加者が自らのおかれた社会状況のなかで表現を編みあげることによって覚醒し、ワークショップを自律的に展開できることを、並行的かつ循環的に可能にするメディア論的方法論である。第三に、この「批判的メディア実践」に基づいた、参加体験型で表現活動を行う複数の実験的ワークショップの社会文化的なデザイン (コーディネート) を行った。

堀グループは、「脱構築エンジン」の研究・開発として以下の二点に焦点を絞り議論を進めた。第一に、脱構築エンジン基盤モデル設計・試験として、エンジン構築のための理論モデルについて研究し、基盤モデルを設計した。基本概念、及び、応用例に関して発表を行った。さらに、画像データを対象とした脱構築エンジンの試作版ソフトウェアの製作、及びワークショップにおける脱構築の枠組みの適用を行い、次年度において実験・評価を行うための準備を整えた。第二に、多重文脈システムの研究・開発として、基盤モデル設計と並行し、画像データを対象として、そこに含まれる多重文脈を見つけるための解析手法の検討を行った。基本的な技術について検討し、研究会発表を行った。

西村グループはおもに二系統の研究を実施した。第一に、直感的インタフェースの研究として、ワークショップ会場にて参加者の活動を記録、簡易表示するプロトタイプシステムを開発した。本システムは、各参加者の音声、写真、ペン操作およびおよその位置や向きを再生できる。また、環境側に設置する装置としては、複数の参加者がペンタブレットシステムに各自のペンを使って書き込み、これを大型ディスプレイで共有するものとした。第二に、市民芸術創出のためのソーシャル・ネットワーク・システム (SNS) の研究として、最新の各種 SNS を調査し、特に先進性のある「Modulobe」という仮想生物を作成し共有するシステムにおける SNS 部を強化する開発を実施した。作品のパーツごとに制作者情報を保有するため、作品が再利用されていく創造の連鎖を取得できる。

以上の各グループの研究活動が有機的に関連し協調することで、次の成果をあげることができた。まず、4 研究グループの連携を視覚化した図を制作し (図 1)、それをシンボルとして「メディア・エクスプリモ」のウェブサイト (<http://www.mediaexprimo.jp/>) とパンフレットを作成した。また、ワークショップを実施し技術システムと文化プログラムの連携実験を試みた (図 2)。さらに、広くこの研究プロジェクトの意義と課題を問うために、日本マス・コミュニケーション学会、デンマーク・コペンハーゲン大学、同オールボ大学での国際シンポジウムでこの基本構想を共同発表し議論することができた。

次年度はこれらの成果を踏まえ、さまざまな社会問題を抱える公共的なコミュニケーション

オンライン空間の活性化を図るための表現活動に着目する。そこから表現を支える文化プログラムと技術システムについての研究と開発をすすめる。具体的には公共文化施設であるミュージアムや放送局などと連携したワークショップを「批判的メディア実践」の観点から実験的に実施し、この研究プロジェクトを展開する。

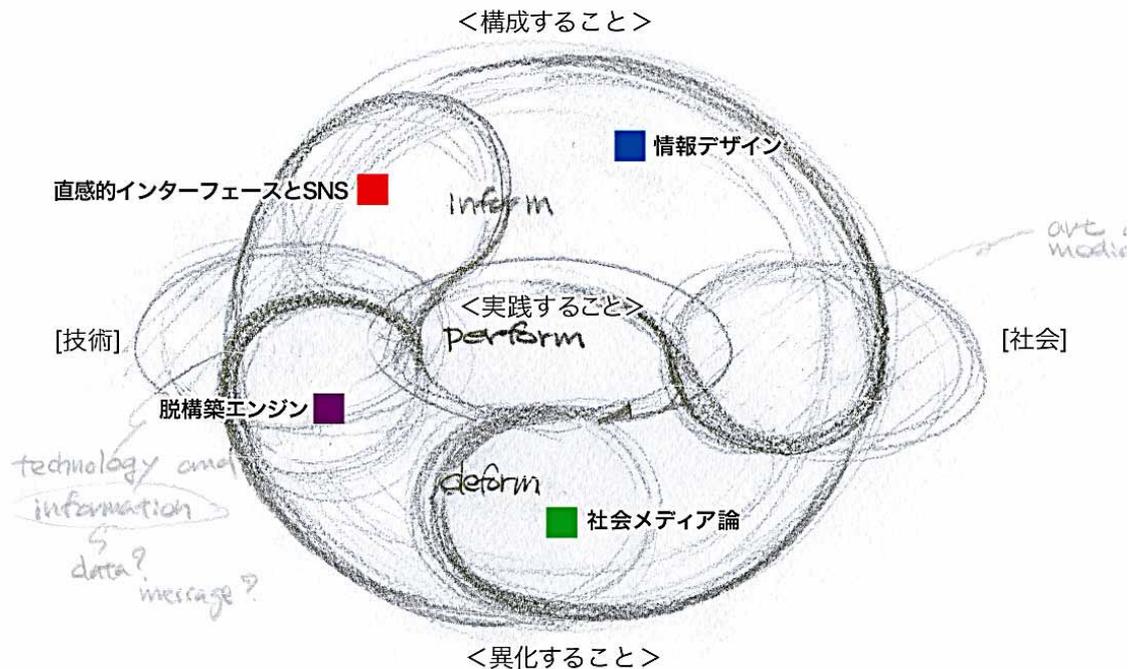


図1. 4研究グループの連携

本研究体制を支える背景を動的な円環として視覚化。円環は、<実践すること>を核に、上下の<構成すること>と<異化すること>、左右の[技術]と[社会]で構成。専門知が連携するこの円環の上に4研究グループの立ち位置を示した。また、円環の右に、現実社会の表現者を加え配置することにより研究の連携が5つのユニットの循環として構成されることも含意している。



図 2. 異文化理解をテーマにした表現ワークショップの実施状況（コペンハーゲン大学 2007 年 3 月 13 日）

写真を使ったコラージュで、デンマークグループが「日本」を表現。日本グループが「デンマーク」を表現、それぞれが表現の意味と解釈を交換することから両者の対話が生み出された。

3. 研究実施体制

(1) 須永グループ

- ① 研究分担グループ長: 須永 剛司（多摩美術大学 教授）
- ② 研究項目:
 - ・ 市民芸術のための表現活動の可能性空間デザイン研究・開発

(2) 西村グループ (研究機関別)

- ① 研究分担グループ長: 西村 拓一（(独)産業技術総合研究所 グループリーダー）
- ② 研究項目:
 - ・ 直感的インタフェースと市民芸術創造 SNS(ソーシャル・ネットワーキング・システム)の研究・開発

(3) 堀グループ

- ① 研究分担グループ長: 堀 浩一（東京大学 教授）
- ② 研究項目:
 - ・ 「Deconstruction Engine=脱構築エンジン=」の研究・開発

(4) 水越グループ

- ① 研究分担グループ長: 水越 伸（東京大学大学院 助教授）

② 研究項目:

- ・メディアを活用した市民芸術に関する俯瞰的理論と実践プログラムの研究・開発